

はたらく女性のフロア通信

発行日 2016年9月25日

NO. 28



はたらく女性のフロアかながわ (WWFK)

〒221-0855 横浜市神奈川区三ツ沢西町8-25-203 本間重子気付

電話/FAX 045(323)0653 E-mail wwfk@hotmail.co.jp

HP <http://wwfk.jimdo.com/>

「奄美群島の女子挺身隊」のお話

大谷葛代さん(会員・元横浜市従婦人部)が放送大学の卒業論文でまとめられた、「奄美群島の女子挺身隊」についてのお話を総会で聞きました。ご自身奄美大島出身で、お母様が女子挺身隊員(以下挺身隊)の経験があり、64歳で他界されたことが論文をまとめる動機とのことでした。

奄美群島は、鹿児島県本土と沖縄県の間にある島嶼(とうしょ)。本土鹿児島市から最南端の与論島までは、航路にして549kmにあります。戦前は奄美大島要塞司令部や諸部隊が配置されていました。戦後は米軍政下におかれ、1953年12月25日、日本復帰を勝ち取りました。産業では明治後期に基幹産業となった大島紬で知られています。動員された挺身隊の多くが、大島紬の職員の女性たちです。国民動員計画により動員された挺身隊472,573人の内奄美群島からは2,500人が動員されています。

大谷さんは、文献の調査以外に、奄美大島に出

かけて、実際に挺身隊に行かれた80から90代の8人の女性たちへの聞き取り調査をしました。

14歳~21歳の年若い女性たちが長崎・山口・熊本・愛知・大阪の軍需工場に動員されています。役場や親方の誘い、志願が多く、全員が「お国のために役立つため」と受けとめていました。しかし、処遇は動員先にもよるようですが、5人が「粗末な食事でもひもじい思いをした」と語っています。戦後は「みんな食べていくのが精いっぱいだった」、「戦争は殺し合い以外のなにものでもない」と語った元挺身隊の言葉には重みがあります。

価値の高い研究になっていると感じました。初めて聞く挺身隊という言葉や、戦争の証拠処分の指導の話、奄美大島という土地など、すべてが興味深いお話しでした。(会員 中嶋ひとみ)



大谷葛代さん

第8回WWFK総会開催

総会を、7月21日(木)18時から19時、かながわ県民センター9階で開催し、13人が参加者しました。

2015年度活動報告と2016年度活動方針(案)、2015年度会計報告と2016年度予算(案)、監査報告、役員提案がされ、議案はすべて承認されました。

池田さんから、今後は、会費未納の方には連絡を入れたほうがよいという提案がありました。

本山さんから、県立図書館の再編整備について、①県立川崎図書館を廃館にしないこと②県の図書館にPFIを導入しないこと③産業科学の公害関係の歴史的図書を守る必要があるため、県立川崎図書館をかながわサイエンスパークに移行統合せず、きちんと公立図書館としての機能を残していくように、パブリックコメントを7月23日までに提出してとの協力要請がありました。



総会の様子

伍さんから、PFIは県が、設計から建設まで民間委託で作らせるので、初めに何億もお金が出て行かないため得をしたように感じてしまうが、何年もかけて県が借金を支払っていくことになるのでお金がかかるうえ、管理そのものも変質してしまい、中身まで全部変えられる可能性があるとの助言がありました。

さらに伍会員から、県立大船フラワーセンターは3つのスリム化に加え、具体策のひとつに、池を埋め立てて桜の木を植える、温室を改修して展示室にする、関谷の分園を廃止して花苗は買う、というものです。

村田さんから、この会は、『働く』というところに意義がある。働いている人たちがもっと生き生き働けるように、そして老後生き生きするために応援できるよう、みんなで学習していったらいいのではないかと、会の設立趣意を意識させる発言もありました。

【2016年度の事務局体制】

代表 小島八重子

事務局 池田資子、佐久間由美子(会計)、

伍淑子、本間重子、中嶋ひとみ、村田泰子

編集委員 池田、本間、小島 会計監査 白井光子

日立で 定年退職を迎えて…①

会員 中村 由紀子



中村由紀子さん

2012年秋、めでたく定年退職プラス雇用延長を終えることになりました。44年半の勤務を自分なりにどう締めくくったらよいか、職場を去る日を迎えるにつれ、想いを巡らせていました。職場で送別会を催してくれるというので、ことさら何をこの44年間で職場に遺してき、伝えたかったかと想いを馳せていました。

送別会の日、これまで私の仕事に関わってきた他部署の人達も参加してくれました。それというのも、私の担当課長が事業部で推進している「ワーク・ライフ・バランス」活動の推進責任者ということで、「子育てと仕事の両立」を果たし、定年退職をした経験を語って欲しいという意図があったようでした。

担当課長は以前、朝会の席で「ワーク・ライフ・バランス」の全社推進会議で「東レの佐々木課長から子育てと仕事の両立体験を聴き、男性の課長が家事も育児もこなし、さらに仕事も定時間内でしっかりやり遂げた体験談に感動した」と報告しました。それを聴いた同僚の男性社員が、「東レの佐々木課長に聴かなくても、現に中村というロールモデルがいるではないか」と課長に進言したことから、私の送別会の席で是非その話を聴取したいとの思惑があったようでした。席上、

開口一番担当課長は「日立に入って後悔していますか？」ときいてきました。私はまじめ顔で「いいえ、日立に入社したことに後悔はしていません。なぜか、日立が私を育ててくれましたから」と答えました。厳しい職場環境で女性が定年まで働き続けてきたこと、子育ても仕事も両立させるために何を改革し、切り開いてきたのか」を語りました。

なぜ日立に入社したか？から始まります。多くの方が青年期に描いた夢を私も中学生3年生のころからか考えるようになり、高校生のころにはかなり具体的になりました。しかし、私の人生設計を高校の時から描いてきた夢は後述の挫折から始まります。高校1年の時、音楽部の部活の担任から、「声楽の道に進んだらどうか」と言われ、親に相談したところ「そんな学費のかかる大学など行かせられぬ」と一蹴され、それなら音楽で生計が立てられる職業をと考え、ピアノ調律師を目指して、専門学校に入学するための準備を始めました。

さいわい、部活の担任の先生は無報酬で、3年間毎週自宅で受験に必要な科目、調音やコウリュウブンゲンを教えてくださいました。学費を自分で捻出するため、高校卒業後、第一生命に入社し1年間でほぼ、学費は捻出できました。

*中村由紀子さんは、1992年3月3日のひな祭りに9人の女性と日立製作所に対し、「男女による賃金昇格差別是正」を求めて東京地裁に提訴、2003年勝利和解しました。退職後も電機・情報ユニオン神奈川支部委員会として電機産業に働く人たちの雇用と権利を守るために奮闘しています。中村さんの経験を多くの働く女性たちのほげましになればと思い掲載します。

WWFK・らいてうの家ツアーから

9月17日(土)～18日(日)

9月17日から18日にかけて、長野県上田市のらいてうの家訪問と別所温泉の無言館と山本宣治記念碑を訪ねる旅を企画しました。参加者は6名でした。みなさんの感想です。

▼らいてうの家はもとより、2001年秋、長野市での学会の帰途にひとりぶらついた塩田平で知った別所温泉と再訪を願った無言館にも惹かれて参加した。

女性の社会的地位向上や平和を願ったらいてうの思いが込められた家とそれを継承する上田の女性たち、山宣碑が建立されていた信州の鎌倉といわれる別所温泉、画才を絶たれた戦没画学生とその遺族の無念さが伝わってくる無言館。

明日が安保関連法成立から1年という機会の充実した旅であった。(鈴木 敏子)

▼「わたくしは永遠に失望しないでしょう——」喜寿を目前にしたらいてうが、新日本婦人の会結成のお祝いの言葉を寄せたあと、自伝の最後をこう締めくくっていることを思い出しました。この確信はどこから生まれるのでしょうか。

生誕130年、らいてうの家オープン10年の今年、WWFKの親しい皆さまとご一緒できたこと、とても幸せでした。らいてうの志を受け継ぐ行動を若い世代につなげたいですね。(矢野 操)

▼今回は偶然、2回続けて長野を訪れることになり、日本の戦争と平和の歴史を深く学ぶよい機会となった。特に無言館では、遺作だけではなく遺品をじっくりと見ることができた。手紙やはがきには、「元気に軍務に励んでいます」とか「絵具とテレピンを送ってください」とか、戦時とは思えないゆったりとした文面ばかり、ほんとうのことが書けないつらさは想像するしかない。

(佐久間由美子) 3ページ下に続く

平和への想いをますます強くした ポーランド旅行

会員 中嶋 ひとみ

◆アウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所 を見学して～

「春にポーランドに行かない？」と昨年、先輩看護師のUさんから誘われました。花の季節のヨーロッパへの夢が膨らみました。海外旅行は25年ぶりです。ISの襲撃や泥棒・スリの恐怖、でも、一度は花の季節にヨーロッパに行ってみたいという動機でした。感の鈍い私です。

旅行案内書が届いて、はじめてアウシュヴィッツを訪ねることに気づきました。以前から映画や写真を見たり、話は聞いていたので、コワイというイメージが先立ちました。行きたいけど怖いし不安、そんな思いで旅立ちました。

ワルシャワへの10時間の飛行機の旅も疲労感を感じず、初めはショパンの音楽を聴きながら、バラやアマポーラ真っ盛りの観光の旅を満喫していました。しかしワルシャワ蜂起博物館の見学や、ゲットー跡などの通訳の説明を聞き、次第にポーランドの不幸な歴史について意識せざるをえなくなっていきました。第二次大戦で、ワルシャワの街はことごとく破壊されつくし、戦後、古い街並みが復元されて世界遺産になっていること、ポーランドには大勢のユダヤ人が住んでいたこと、ナチス占領下にワルシャワ市民がナチスに蜂起し戦ったこと、スターリン時代から共産主義に対する反感が強く、社会主義政権崩壊後の現在も、反社会主義や反共産主義の意識を人々が強く持っていることなどを知りました。

旅行5日目に、アウシュヴィッツ博物館とビルケナウ収容所を見学しました。ナチス最大の強制絶滅収容所で、ヨーロッパ中から送られてきた130万人のうちの110万人がここで死亡し、その

90%がユダヤ人ということでした。その人たちの靴やカバン、食器、メガネ、毒ガスの缶などがケースに陳列されていました。ガス室、焼却炉、高圧電流が流された有刺鉄線、銃殺の壁などを見て回り、目をふさぎたくなるような苦しい状況がもろに迫って来た感じでひどくショックでした。それとともにこのような不幸を生む戦争は恐ろしい、二度と繰り返してはならないと感じました。また、高い文化を持つ20世紀のドイツ人が、なぜヒトラー政権になびいていったのか、ナチスの独裁体制を許すようになったのだろうかとも思いました。

ポーランドでは、こうした負の遺産を残して、多くの人々に平和への願いを伝えていました。しかし日本もドイツと同じく侵略戦争で、多くの中国や朝鮮の人々を殺してきています。それなのにその事実は今あまり若い人々に教育されなくなってきており、侵略戦争への深い反省も薄らいできているようにも感じられます。

ヒトラーは、大統領緊急令を制定して議会を通さずに次々と「ナチ法」を制定していきました。今、安倍政権もヒトラー同様、憲法に緊急事態条項を入れようと狙っています。また、朝鮮人や移民を差別し、日本人を優遇するような意識を持っている点なども、ヒトラーに近い感じがしてなりません。武器を作り、売り出す企業の片棒を担いで諸外国と交渉する安倍政権。防衛予算もどんどん増やし、戦争法も暴力的に強行採決しました。

本当に恐ろしい時代になってきつつあります。ナチスのような暴力的な政権の台頭を決して許してはいけない、残虐な戦争への道を二度と踏まないようにしなければいけないと、今、強く感じています。



アウシュヴィッツ収容所ゲート
“働けば自由になれる” との文字

▼無言の作品たちが語りかけてくる…。

長野県上田市にある美術館のひとつではあるが、そこに展示されている全作品は戦時中、学徒出陣して帰ってくることのなかった青年たちの遺作・遺品の数々である。

「戦没画学生慰霊美術館」である。美術学校であるいは独学で美術を学んでいた才能ある若者たちが、どのような気持ちで制作したかは未完のまま戦場に赴かねばならなかったのかを、考えずにはいられず無言で作品と対話した重い時間を過ごした。一人でも多くの方が訪れ観てほしい。

(本間 重子)

▼らいてうの家は3年前の冬に訪れてから2回目。源氏物語をジェンダーの視点から読み解くお話をされたのは、宮島満里子さん(古典研究75年)。

なんと91歳。艶やかでやさしい声に、まるでタイムスリップしたかのように物語の世界に引き込まれます。男女間の愛に感わされながら



らいてうの家で

も出家の道を選んだ浮船(『宇治十帖』)。今も昔も女性たちの葛藤は続いています。

無言館も2回目。訪れたとき、激しく雨の降る様は、まさに若者たちの涙のようでした。

(小島八重子)

君嶋ちか子がゆく⑤

・・・神奈川県議会報告

津久井やまゆり園と指定管理者制度

県立津久井やまゆり園の事件に関わり、私達が問題としているひとつが、指定管理者施設であることです。

【県直営だった頃】

津久井やまゆり園は、1964年、公立重度障がい者施設の全国的先駆けとして設置されました。当時「迷惑施設」とされる中で、地元と約したことは、①職員の地元採用、②地元商店の利用でした。これらと共に交流を重ねながら、園と地元の信頼関係は作られてきました。

職員採用は、地元採用の非常勤職員もいます。福祉職として専門試験が設けられていた為、福祉系大学卒が主流でした。

県職員として、他の職場に異動が可能であったことは、職員が働くうえで貴重な役割を果たしました。他職場を経験し広い視野から考えることを可能にする、職業病などが生じた場合にも別の職場で勤務継続ができることなどです。

運営面でも、効率のみの追求ではなく、丁寧な打ち合わせ、各地の福祉職が集う定例会議、全員参加の会議などが行われていました。障害に対す

る理解、施設のあり方などはこのような場で深められ、働くうえでの支えとなっていたでしょう。

【指定管理者制度の導入】

2005年の指定管理者制度導入で、事態は変わりました。

経費削減のため、地元商店からの購入は不可能となり、冷凍食品や調理済み食品が増え、食事の質が明らかに低下していきました。

人件費の削減は労働条件の低下をきたし、職員確保は容易でなかったと思われます。その分、応募者に求められるハードルは低くならざるを得ません。

県直営時のような専門職としての位置づけもなく、日常的にも理解や認識を深める場は少なかったでしょう。

余裕のない働き方とも相まって、職員が様々な困難に直面していたことは想像に難くありません。

【制度見直しは必須】

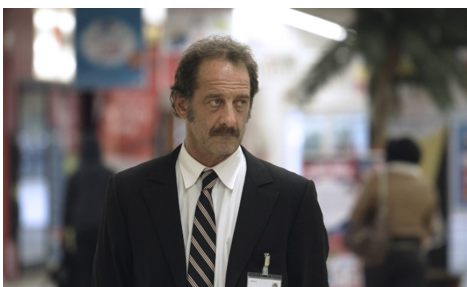
コスト削減と「サービスの向上」を強い続ける指定管理者制度は、指定を受けた事業者をも疲弊させながら、様々な分野で「公」を蝕んでいきます。コスト削減のみを追求し「公」を失うならば、被害を被るのは国民です。



映画が好き

「ティエリー・ドグルドーの憂鬱」

会員 池田 資子



この重苦しい作品が、本国フランスで大ヒットした背景には、失業率10%前後という現実があるからだろう。

ティエリーは51歳。リストラにあい1年半、求職活動をしている。彼には妻と障害を持つ息子がいる。家族との生活をまもりたいと、職業訓練で資格を取り、スカイプで面接試験を受け、就職対策のセミナーに参加するが、良い結果が出ていない。共にリストラされた仲間は、会社相手に闘うと意気まぐ。彼は職を失ったことで心が壊れ、穏やかに生活することを望んでいる。

職探しを経験している私には、職安や銀行の担当者との交渉は身につまされる。無駄な職業訓練の紹

介や、自宅を売却することで生活を成り立たせようとアドバイスする事などには、失業者への配慮がないように感じる。それに対して自分の意見を言う労働者としての意識が、彼にはあるのだが。

ティエリーは、やっとスーパーの監視員として働くようになる。万引きを監視し摘発する仕事は、自分と同じようにつましく生活している者の抱える問題と向き合うことになる。彼の憂鬱がまた増える。スーパーの客だけでなく、働く仲間の不正が次々と明らかになり、解雇される。特に働き者と評判の女性が解雇後に自分の職場で自殺する事件は、彼にとってどんなにつらかったらう。こんなことが続くのか、それでも働き続けるのか。

重いテーマの話で救われる点は、夫婦でダンスを楽しみ、やさしく息子の世話をする場面や、妻が不平不満を言わないことである。また、労働者が寝泊まり出来るトレーラーを持っていることは驚きである。労働者のレベルが日本と違うのだろうか。失業手当も長期間出ている。会社と闘った仲間はどうなったのか？描かれませんが、その後が気になる。

今、失業・格差・貧困が深刻な問題になっている。日本の映画でも、真正面から労働者を取り上げるべきではないだろうか。